



おんなの視点

エネルギー広報企画舎

森崎 利恵子

学生時代を原子力系の学科で過ごした私は、電力会社に入社。初めての職場は原子力発電所だった。発電所での勤務は3年余りの短い期間であったが、上司や先輩、協力会社やメーカーの方々に色々教えていただいた。いろんな会社の方がそれぞれに一生懸命発電所を支えている、普段は軽口ばかりで気のいいおっちゃん風の人も、現場では使命感溢れる職人に変身する様が、退社した今でも印象深く残っている。

福島第一原子力発電所の事故を受け、事故を起こした東京電力、防げなかった政府などに国民の怒りが向くのは当然だと思う。原子力発電の「事故」と「存在」が一緒くたにされ、原子力発電自体も批判されている。それもある程度は仕方ないと思う。だが中には、原子力発電による電気を悪徳商法による押し売りなどと表現した人もいと聞く。あの頃お世話になった人たち、今も発電所を支えている人たちは、「電気をつくって送ります」ことに誇りを持って働いていたはずだ。それなのにそんな風に言われてどんな思いをされているのだろうか、悔しい思いをされているのではないだろうか。原子力発電に携わった身として、なんともやりきれない。

今回の東日本大震災および福島の事故は、これまで当たり前のように使えていた電気について、国民規模で深く考えさせられる機会になった。特に被災地や関東地域では停電を強いられた方も多く、温暖化防止対策の気運が高まっていた頃の比にならないのではないだろうか。基幹電源として安定した電気を送り続けるはずだった原子力発電は全国的に再稼働できず、その役割を担えていない。電力を十分に供給できる体制が整うまでは、全国各地で国民生活や産業において、何らかの制約に対する心配が残る。一方で、今回のような放射性物質を環境に放出する事故になれば、食品や環境の安全が脅かされることも身にしみた。これからの日本の

エネルギー政策の見直しも始まったが、あらゆる面を考慮する必要がある、脱原子力も選択肢の一つとして挙げられている。

電気を使う側の一般国民には、脱原子力や再生可能エネルギーの拡大を支持する意見も増えたようだが、そのために自分には何ができるのかをそれぞれが考え、そして何か具体的で有効な行動に繋がっていくならば、私はそれもいいと思う。高齢の方や病気や障害を持つ方など、生活にエネルギーを必要とされる方もいる中で、健康な人は大いに省エネし、暮らしにおけるエネルギー消費のあり方を変えることはいずれにしても必要だ。

電気を作る側の原子力業界にとっては、原子力発電の拡大はもうないとして、減原子力で続けるにしても脱原子力で止めるにしても、両方とも厳しい道なのではと私は思う。続けるとなれば、安全性向上への一層の努力が不可欠であるし、何より地の底深くに落ちてしまった国民からの信頼を取り戻すのは並大抵のことではない。一方、止めるとなれば、原子力技術に明るい未来はなく、今の関係者・技術者のモチベーションを維持するのはこれも困難であろう。そして両方とも、技術力は低下させずにむしろ向上させなければならず、関係者の切磋琢磨、優秀な人材確保、そのための業界の魅力アップと、厳しくともやっていかなければならないことは多い。

一方、政治家や学識者、経済界など、然るべき立場で政策策定に携わる方には、あらゆる現場で汗を流し世の中に貢献している人をも想い、広い視野で使命を持って知恵を出していただきたい。日本が世界に誇れる資源は、技術や知恵が豊かな「人材」のはず。日本が国際的な責任を果たしていくためにも、どうかみすみすこの資源を失っていくような世の中にはしないで欲しい、と切に願っている。